

2025年5月の総評に代えて 高橋修宏

五月来て異言呟く瀕死体

田崎森太（東京都）

「異言」とは、ついに解読できない言葉なのか。聖母マリアの月とされる「五月」と相俟って、「瀕死体」からはキリストの殉教など宗教的なイメージさえ立ち上がるようだ。

うさぎうさぎ

白いうさぎの波を超え

だれもいくさをおぼえていない

うたた（岡山県）

まず、出雲神話における白兎の伝承を想い起こした。そうすると、三行目の「いくさ」は大和王権の征服を正当化させた国譲りの神話か。結句の「……おぼえていない」は、痛烈なアイロニーとして読める。

歩き出す他人の足を見て進む

ゼブラゾーンと南京事件

詩央えみる（大阪府）

何より、大惨事や収容所のイメージを、まず想起させる作品。そのとき、寄辺なきわれわれは、「他人の足を見て進む」ことしか出来ないのかもしれない。

〈ほんとう〉にたどり着けずに

試着室の鏡に雨が匂う土曜

常田瑛子（山口県）

「試着室」のシーンと受けとめたが、〈ほんとう〉は果して到来するのだろうか。二行目の飛躍には、ささやかでありながら切実な諦めが書きとめられている。「雨が匂う土曜」が妙にリアルだ。

風薫る嘘をつかない介助犬

蝸牛（奈良県）

なるほど「介助犬」は従順だ。「嘘」をついたり、あざむくこともない。そんなパートナーとの穏やかな日々には、「風薫る」がふさわしい。

電車には無数の喉が詰められて

桜庭 紀子（和歌山県）

普段は見えないにも拘らず、「喉」は食べる、喋べるという日常的な動作に欠かせない器官。そんな「無数の喉」が詰められているという発見が妙に生々しい。どこか、災厄のイメージも反響するような作品。

陽炎の巡回図書館停車中

ほしひかせ（群馬県）

うつらうつらとした春の光景のひとこまか。「陽炎」という季語から、「巡回図書館」に置かれた本のイメージも想像させられる。

びーどろ びーどろと
外殻のとれた じいちゃんが
畑を歩く

落合 志帆（栃木県）

一行目、「びーどろ びーどろ」は、夢野久作の小説に出てくる奇怪なオノマトペだったろうか。「外殻のとれた」という修辞からは、もはや人ではなくなった「じいちゃん」の奇怪なイメージも立ち上がるようだ。

うたうとはうったえること
丹田に
ふるえつづける水鏡がある

川上 真央（東京都）

何より、まず力強いメッセージを感じる。あやうく陳腐になるところを、「水鏡」の発見により作品として昇華させた。

水のにおいがするねと
妻が目を覚ます
武藏野の五月

広瀬 心二郎（埼玉県）

荒川洋治の有名な詩篇〈水駅〉の冒頭を想い出した。取り立ててエキセントリックな修辞や比喩ではないものの、どこか懐しく穏やかな光景が見えてくる。数多くの小川や用水が流れる「武藏野」という地名も効いている。

まずそこに落下があって懐かしい

内海千智（東京都）

もしや、作中主体は無重力な宇宙空間から帰還したのだろうか。なるほど「落下」という当たり前の現象も、宇宙から見たら不思議と「懐かしい」のかもしれない。